

## 2022年4月5日「2022年度多摩大学入学式」寺島実郎学長の祝辞

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。保護者の皆さんもご子弟のご入学、心からお祝い申し上げます。

学長の寺島です。

経営情報学部 398 人、グローバルスタディーズ学部 157 人の合計 555 人の入学ということで、新年度がスタートしていきます。

多摩大学は、大変若い歴史の浅い大学ですけれども、昨年度末、3月末で、学部の卒業生 9694 人、大学院生 997 人ということで、ようやく 1 万人の卒業生を擁する大学になってまいりました。私、世の中を動きまわっていて、「多摩大学の卒業生です」という挨拶を受けることが、かなり増えてまいりました。

一隅を照らすという言葉がありますけれども、先輩たちが社会の一隅を照らすコーナーストーンとして、なかなか味わい深い存在感のある仕事をしてるんだなということを感じることが、だいぶ増えてまいりました。例えば、大学院の卒業生の中には、シダックスの志太さんだとか、経営者として大変な成功を収めている方もでてきてます、学部の卒業生にも、グローバルスタディーズ学部は観光に焦点をあてたホスピタリティマネジメントを重視している学部だということもあって、航空会社の客室乗務員、JAL、ANA の客室乗務員になっている方にも、声をかけられることがあります。

その他、今日ご来賓に来ていただいている、地元を支える金融機関である多摩信用金庫、先輩たちが多摩信金に 14 人すでにお世話になっているわけですが、多摩信金と大学との提携というのが、非常に深まっています、地域の様々な活動と一緒に立ち向かう、そういった地域活動のプロみたいな方が、多摩信金から長島教授が多摩大学の教壇に立ってくれたり、コミュニケーションが非常に深まっています。

また、土曜日に行ってる私のゼミから、都議会議員になっている卒業生もでてきて、その他グローバルスタディーズ学部の一期生だったんですけども、大変にまじめに多摩学ということで、地域社会の研究をしている女性だと思ってみたら、今、足立で子ども食堂を運営している先輩がでてきています。

その他、まだ卒業していないんですけども、学部生の中に、ついこの間の北京オリンピックでモーグルで活躍した富高日向子さん、準決勝までいきましたけれども、そういう活躍してる学生もでてきていますし、多摩大学のフットサルというのは、指導が良いと僕は思っていますが、全国のフットサルの大会で 3 連覇するという実績を上げてきている先輩たち

も出てきてます。いずれにしても、世の中の一隅を照らす存在として、多摩大学で学んでいてほしいなと思います。

私は、いくつもの大学に向き合ってきた立場なんですけれども、多摩大学の個性は、いったいなんだろうかと、多分、多摩大学が自信をもって世の中に対して、多摩大学はこういう大学なんだと言える点が、私は2点あると思っています。

一つは、多摩大学というのは、実学志向の大学ということです。社会の現場で実際に役に立つ学問を身に付ける機会、そういうものを提供する場として教壇に立っている先生たちが、社会で活躍してきた人たちが、実際に現場体験を背負った人たちが教壇に立ってくれてるケースが非常に多いというのが、一つが多摩大学の特徴です。

二つ目は、ゼミ中心の大学で手づくり感のある人間形成といいますか、人間教育というものをやっているというのは、多摩大学の誇りだと言っていいと思います。我々はコロナの2年間に苦しんでくるわけですけども、多摩大学は、マンモス大学がリモート中心の授業というところに行かざるを得なかったのに対して、先生たちが頑張ってくれたなと私は本当に思いますが、対面中心の授業でこの2年間乗り切ってきました。コンパクトであるがゆえにそれだけの教育効果に繋がる授業ができてののかなと自負しています。

そこで、新入生の皆さんに、この4年間、いったい多摩大学でどういう生活をしていきたいかということを改めて考え直してみたいんですけども、一言で言うと大人への道筋をつける4年間にしてもらいたいと思います。

今年の新入生は、極めて大事なタイミングで新入生になったと言いますか、ご存じのように今月から日本では法律的には18歳が成人ということになりました。したがって、大学の1年生は、法律的には、ほとんどの方が大人として、つまり未成年ではない、行動に責任をもたないといけないということで、大学生活を送らざるを得ません。

ただ、法律的には大人ですけども、じゃあ、本当の大人ってなんだろうということを入学式にあたって考えてもらいたいと思います。私は、本当の大人という言葉を使いましたけど、古今東西あらゆる社会において大人と認知されるにはいくつか条件があります。

一つはまず、経済的な自立です。ですから保護者の方の経済的支援で学んでる学生という立場は、社会的には本当の意味で経済的に自立しているとは言えませんから、大人とは言えません。自分の手で飯を食っていく、自分の手で生きていくという、そのための準備期間としてこの4年間にしてもらいたいなと思います、謙虚にですね。

2番目は、言うまでもなく精神的自立です。自分を客観的に見ることができるかどうか、大人の要件です。I・My・Meという言い方がありますが、私、私、私なんです。私のことだけが視界に入ってる人間のことを餓鬼(がき)といいます。我(われ)、鬼(おに)と書きますね。我、我、我なんです、価値観が。そんな世界観で生きてる人間を世の中は大人と呼びません。とかく今、日本全体が、世の中全体が、今・ここ・私と言って、今のことしか考えない、このことしか考えない、私のことしか考えないという世界観の中にはまりつつあります。

私は、大人になるということは、今だけではなく、過去から未来に向けての時間軸の中で物事を考える力を持てるかどうか、ここだけではなく、世界でおこってる出来事、例えばウクライナのことできえ、皆さんはドキドキしながら見てるだろうと思います。世界がどうなっているのかという広い関心領域、それから、私のことだけではなく、自分の周りの人間に対する配慮、あるいは世の中の多くの人に対する心配りみたいなものができてくることが、大人に進んでいくということのステップなんです。

だから、今・ここ・私という世界観から、この大学で学ぶプロセスの中で少しでもより膨らみのある視界をもった人間になってもらいたいなと私は心からそう思います。

皆さんは、21世紀に入った時代を生きてきました。生まれてきて今日までの20年間、我々からみると21世紀少年という言葉がありましたけど、21世紀に生まれた少年少女が、いよいよ大学に学び、社会人になっていく時代が来たのかなと。

この21世紀の20年間というのは、ものすごい勢いで世界の中でアジアが台頭している時代です。アジアの世紀と言われ始めてます、21世紀。私は学長に就任して以来、今はコロナで若干地団太踏んでますけど、諸先輩の中に、つまり皆さんの先輩たちの中にアジアへの短期、長期の留学体験を通じて自分自身を見つめ直して大きく成長した人たちもできています。アジアの躍動と正面から向き合える日本人になることが21世紀を生きる人間にとっては、マストです。

二つ目は、皆さんは生まれた時から、周りにインターネットのある時代を生きてきています。1990年代の半ばから、我々の至近距離にインターネットというものが登場してきた、今DXなんて言う言葉が盛んに使われます。DXの時代を生きるというのが皆さんに与えられてる一つのテーマです。

結局、人生というのは、自分とは一体何なんだろうかということを問い詰めて生きるプロセスです。その中で何をなすべきなのか、自分が頭で、しっかり考える力を身につけてもらいたい、私はこの大学の4年間で、多摩大学にいる時に一つでいいから、本気で学ぶということに立ち向かってもらいたいですね。自分のテーマを見つけて。一つでいいから深く物事

を考えるきっかけをつかんでもらいたい。

多分この4年間というのは、その次の時代、つまり皆さんの人生、ものすごく長いです、100歳人生というわけですね。卒業して就職決めたら、人生、方向感が決まる時代ではありません。そこからほぼ80年、生きなければいけない。じっくりと力をつけていくための準備期間としての4年間で友達とコミュニケーションを深めながら、先生と向き合いながらゆったりと楽しんで、人生設計を考えてもらいたいと言うことを入学にあたって、学長として申し上げておきたいと思います。頑張ってください。